

くらしナビ 生活 Lifestyle

kurashi@mainichi.co.jp

もうひとつの

学童疎開

— 光明学校の障言児たち

戦後も4年間、上山 口に運ばない子もお田温泉(現長野県千曲市)での集団疎開生活を余儀なくされた東京都立光明学校(現光明特別支援学校)の肢体不自由児たち。空襲がなくなっても食糧事情の悪さは変わらなかった。当時の在校生、今西美奈子さん(75)と大阪府枚方市は「自分の血と人の血を見比べてしまつ、自分のあまじさが嫌だった」と振り返る。食糧の配給が始まるまで、子どもたちは保母の手元をじっと見つめる。けんかにならぬよう、保母たちはイモを一つずつばかりで量って配った。体のまひでうまく食べ物が

元気盛りにたくましく 地域も感銘 広がる支援

母は黙って頭を下げ、玄関へ向かった。「迎えに来るなんてうそだ。もう帰れない……」その夜、保母がはがきを持ってきて野を引いてくれた。お母さん、今日はわがままをいってごめんさい。私はいっしょうけんめいべんきょうして良い子になりますからごあいしん下さい。教えられた通りに書いた。今西さんは末っ子だ

母は「あした必ず迎えに来るから、しんぼうしてな」と言った。「さあ、みんなおやつをいただきますよ」。今西さんを部屋に招き入れながら、保母が母に目くはせするのを見逃さなかった。

が、疎開先には年下の子どもが多かった。足が不自由で畳の上をはってると、スポンのひざがすく破けてしまう。保母に裁縫を教わり、小さい子の服を縫った。夜になると寂しがる子に寄り添った。

母は黙って頭を下げ、やがて今西さんは、面会に来た母が帰る時、背を向けるようになった。「小さい子たちの前で泣いてはいけないと思ったのです」

親元を離れて暮らし、疎開先での成長ぶり、若い保母たちの存在なしには語れない。菊地孝子さん(85)は東京都大田区に「みんな可愛かった。」

保母に見守られ成長

いた親類の家が手狭になったうえ、母には盲目の長女の世話もあつたためだ。

上山田に来て1週間後、母が面会に来た。「どんなことでもがまんするから連れて帰ってー」。泣き叫ぶ娘に

が、疎開先には年下の子どもが多かった。足が不自由で畳の上をはってると、スポンのひざがすく破けてしまう。保母に裁縫を教わり、小さい子の服を縫った。夜になると寂しがる子に寄り添った。

特別な苦勞をしたとは思っていません」と懐かしむ。

脳性まひで知的障害のある弟が、戦争中から光明に通っていた。学校に付き添っていた菊地さんは20歳で疎開に同行し、他の子たちの世話もすることになった。配膳に洗濯、歩けない子を背負っての散歩。牛乳を飲ませようと遠くに行くこともあった。自転車に一斗缶を乗せ、軍への金属供出で欄干が間引かれた橋を恐る恐る渡って帰った。

おいで現在同ホテル会長を務める恒正さん(84)は当時、正春さんに建て直しを進言したことがあった。正春さんは「お前が経営するようになったら、きれいにしたらいい」と量や障子を新しくした程度だったという。



光明学校が疎開した当時の上山田ホテル＝同ホテル提供



保母に支えられ、千曲川で遊ぶ今西美奈子さん(今西さん提供)自宅での取材中、当時の資料を探すうちに今西さんは母から上山田への手紙の束を見つけた。「大事に取っていたんですね」大阪府枚方市で、木村撮影



他の国民学校の疎開児童と違い、光明の子どもたちは地元小学校に通っておらず、住民との接点は乏しかった。それでも菊地さんらの働きぶりは村人の目に留まり、いつしか「光明の保母さんたちを見習え」と言われるまでになった。

地元でも当時を知る人は少なくなったが、温泉資料館館長の滝沢

感想お寄せください
連載への感想や疎開体験を募集します。表題を「疎開」とし、郵便とメールは欄外のあて先へ。アクセスは03・3212・5177。

【木村葉子】

くらしナビ 生活 Lifestyle

kurashi@mainichi.co.jp

もうひとつの 学童疎開

—光明学校の障害児たち

職員室の戸棚の奥にしまひ込まれた古い紙袋があった。戦後25年が過ぎたころ、東京都世田谷区の都立光明学校教諭だった松本昌介さん(74)が板橋区にそれを戻す口を、ほこりを払って口を開けた。現れたのは黒ずんだわら半紙にガリ版刷りした紙の束。どの紙にも「学童通信」という題字がある。

「学童通信」は1945年5月から長野県の上田温泉(現千曲市)に集団疎開していた子どもたちの様子を、離れて暮らす親に伝えようとして作られた。終戦後の同年9月から毎月発行されていたとみられる。

「学寮通信」手掛かりに 調査研究 戦後生まれも

くたまりません。早くその日が来るのを待って居ます。(49年2月、第36号)

通信には平和になって親元に戻れない子どもたちの思いもつづられていた。発行は疎開が終わる直前の49年春ごろまで続いていた。

カリッ、カリッ。随写版原紙のろうを鉄筆が削る、かすかな音が

当時学童だった宇野幸行さん(新宿区)は傍らで作業を見つめていた。3×4角のまですに文字を埋めていく。拡大鏡を持った左手で紙を押さえ、右手で書き進める教諭の姿は気遣いで満ちていた。

職員室で「学童通信」を戻した松本さん(今は疎開していた)は、歴史を調べたいと思いつつ、仕事に追われた。ペタペタと呼ばれる年明り、研修などで光明の歴史や授業実践を語る機会も増えた。

光明学校は08年4月に光明特別支援学校と名称を変え、今は難病の子も在籍している。今年7月、30年以上続く恒例の夏祭りが校内で開かれた。体育館で地域の私立校生がブラッサンドの演奏を披露。リズムに合わせて、光明の児童たちが心地よく体を揺らした。フイナレが近づくと館内は熱気であふれ、障害のある子どもも一つになって踊った。

教諭ら歴史語り継ぐ

松本さんの空欄で続けた光明学校の復興後に教壇に立った。また肢体不自由児教育に関する資料が少なく、参考になるものを探して、紙袋に気づいた。



松本昌介さん

戦争中、都市のほとんどの子が地方に疎開した。松本さん自身も経験者で、校長から光明も疎開したと聞いたことはあったが「珍しいことではない」と思っていた。しかし「通信」の文字を追ううちに「校長が話していた疎開とは、こういうこと

だったのかと知った。信州の秋は寒いので、この町へ来て了。松本さん自身も居た西巣鴨第三、第四両校の学童は色どられた山々に送られて東京へ引(き)上げて行きました。(45年12月、第4号)

光明が疎開していた上田山本町の一角、図画工作を教えた波田野雄雄教諭(故人)は文机に向かい「学寮通信」を作っていた。インクや騰写版原紙が底をつきかかると、父母や地元学校が融通してくれた。

不自由になり、8歳で上田山本町に4年逗留して来た。見よう見まねで作業を覚え、レイアウトを考え、印刷するも読みやすい文字の書き方も習得した。「出来上がった通信を見た時は、誇りしかった。宇野さんは美大へ進み、現在はグラフィックデザイナーとして国際的に活躍する。「波田野先生に出会えたから、今がある。大本木の事務所には通信作りでもらった資料が大

切にしまつてある。目を見かねただけで偏見の目を向けられた時代、強い覚悟で先生たちが守っていた学校が今に続いているのは、かけがえのないことだと思えました」

光明学校は08年4月に光明特別支援学校と名称を変え、今は難病の子も在籍している。今年7月、30年以上続く恒例の夏祭りが校内で開かれた。体育館で地域の私立校生がブラッサンドの演奏を披露。リズムに合わせて、光明の児童たちが心地よく体を揺らした。フイナレが近づくと館内は熱気であふれ、障害のある子どもも一つになって踊った。



●疎開先上田山本町で発行された学寮通信の「1」。45年12月の号は英語で書かれ、疎開への思いがにじむ

光明だけでなく、障害児たちの集団疎開の多くは行政の積極的支援が得られず、学校関係者が自力で疎開先を探した。東京都障害児学校退職教諭の会が32校を調べたところ、一般の国民学校と同じ41年中に疎開した学校は東京聖霊学校、大阪市立盲学校など10校。徳島県立盲学校や高知県立盲学校の1校も、終戦直前の45年7月に疎開した所もある。

伊豆大島にあった知的障害児らの施設、藤倉学園は44年、軍の命令で本土へ疎開させられ、山梨県清里村(現北杜市)で1年を過ごした。厳しい寒さと栄養失調で、園児27人中10人が亡くなった。



●疎開先上田山本町で発行された学寮通信の「1」。45年12月の号は英語で書かれ、疎開への思いがにじむ

光明だけでなく、障害児たちの集団疎開の多くは行政の積極的支援が得られず、学校関係者が自力で疎開先を探した。東京都障害児学校退職教諭の会が32校を調べたところ、一般の国民学校と同じ41年中に疎開した学校は東京聖霊学校、大阪市立盲学校など10校。徳島県立盲学校や高知県立盲学校の1校も、終戦直前の45年7月に疎開した所もある。

伊豆大島にあった知的障害児らの施設、藤倉学園は44年、軍の命令で本土へ疎開させられ、山梨県清里村(現北杜市)で1年を過ごした。厳しい寒さと栄養失調で、園児27人中10人が亡くなった。



光明だけでなく、障害児たちの集団疎開の多くは行政の積極的支援が得られず、学校関係者が自力で疎開先を探した。東京都障害児学校退職教諭の会が32校を調べたところ、一般の国民学校と同じ41年中に疎開した学校は東京聖霊学校、大阪市立盲学校など10校。徳島県立盲学校や高知県立盲学校の1校も、終戦直前の45年7月に疎開した所もある。

伊豆大島にあった知的障害児らの施設、藤倉学園は44年、軍の命令で本土へ疎開させられ、山梨県清里村(現北杜市)で1年を過ごした。厳しい寒さと栄養失調で、園児27人中10人が亡くなった。

感想お寄せください
連載への感想や疎開体験を募集します。表題を「疎開」とし、郵便とメールは欄外のあて先へ。アクセスは03-3212-5177。

【木村孝子】おわり